

天然の恵み生かした留萌港

天塩国随一の良港と折紙

元来、留萌の港は流れの緩かな留萌川の河口にコタンが形成されて、増毛以北の良港として、長い間その存在が認められてきた。

交易のため、多くの和人があつる数千石の舟財船(当時の遠距離航海船)が増毛に入港し、交易を終えた時は、船足に附着する牡蛎貝を落すため、真水の留萌川に入ってきたと伝えられている。

この地方で留萌川が存在が極めて重要であつたことがわかる。西部海岸の交易が益々盛んとなり、留萌が独自の港として栄えたが雄冬岬を中心に数十キロメートルの断崖絶壁にはばまれて、寄港を許さなかつた時代には良港としての増毛港と並んで長い間その声を高めていた。

明治に入つて、住時全盛を極めた福山、江差、函館の三港にかわり、函館、小樽、室蘭などの港が盛んになつたのは、海産物を松前福山を経ず本州方面と交易が行なわれただけでなく、道内産物の増加と、交易物資の複雑化、移民の輸送などの質的変遷とを合わせ和船が洋船型に移つたことから、港湾施設と収容力の要求が、港湾の変化を望んだことである。小樽以北を見ると、概して屈曲が少ない海岸地形のため、良港が

少なく、沿岸数百キロメートルにわたつて船舶を停泊させるような港は少なかつたのである。

留萌港は、この時代から将来の発展を約束され、天塩全域において貨物集散の門戸として繁栄していたのである。

当時、和船でこの海岸を航行する者は、雄冬海岸の無聊さに旅情の悲哀を感じた。

この間にあつた留萌川は流域が僅か十八里(七十二キロメートル)に過ぎないのに、水量の豊富さと、流れの緩かきに加えて、風波の避難に適したので、当時は回航の寄港地として、また新や水の補給地としていた。

留萌川は流域が短いが屈曲が数百あり、運河のように構成されて舟の入る便があつた。

しかし、地勢はあまりにも自然的な港湾の条件を欠いて、冬期間は吹き荒れた北西風に対してはこれをささえざる何等の岬もない。

その上、川口というだけで、港湾としての形はなく全面的に日本海に開放している。

このため、築港を施さなければ風波のため海陸の連絡も不可能であつた。

これは、港の発展の上に大障害になるばかりではなく、関係区域

昨年十一月号まで「留萌市史」は、行財政編を十一回にわたつて掲載しましたが、本年は留萌発展の基盤ともいふべき「留萌港の歴史」について、数回に分けて掲載します。

にとつても経済上の損失は大きかつた。

留萌小史には「明治初年、留萌の世帯はアイヌ二十戸、和人が十戸前後で、まだ栖原家が勢力を持つていたのでアイヌ人たちは、ほとんど使用人になつた」といわれる。

和人は漁期を終えると自国に引揚げていたが、明治中期に入ると留萌に定住するものが次第に増えてきた。

明治十一年には百五十戸だつた世帯数が二十一年には二百四戸、三十一年には五百八十四戸と増え人口の増加とともに産業、商業も伸展した。

漁場をやりながら商売をやる人も出るようになった。

明治十九年、荒物屋八軒、飲食七軒、酒屋と雑貨屋が各四軒、タバコ屋三軒など三十軒程の店があつた。

これらの店の仕入れはすべて船にたより、ほとんどが小樽であるこのほか、留萌より開けていた増毛、松前、秋田なども主な仕入先となつていた。

これらの商品を積んだ船が入港し、一方留萌からは海産物が運び出されていたのである。



■教養・実務

材料別おつまみ 中川紀子/お菓子作り全科 森山幸子/葉いらずの治療法 三橋一夫/墓相入門 中川聖山/あつくないお灸入門 橋本昌枝/集合のわかれ本 渡辺茂/中国10字面占い 楊成/教科書焼いちゃつた 安藤正昭/コピーライター入門 鷹橋信夫/冬山技術セミナー 金坂一郎/フアッション画入門 渡辺ゆみ

■小説・随筆

地図のない旅 五木寛之/遠ざかる足音 曾野綾子/峠 司馬遼太郎/人間とマンボウ 北杜夫/母を拭く夜 畑山博/千筋の黒髪 田辺聖子/春の舞踏 三浦哲郎/隠された十字架 梅原猛/淋しいアメリカ人 桐島洋子/人間の畏 曾野綾子/落差 松本清張/開拓者 依田勉三 池田得太郎/ゴッホの生涯/地の涯の海 メルヴィル/女スパイ パーナート/ハットン/どんべえ物語 畑正憲/汽車は遅れなかつた ハイインリヒ・ベル

■二月の休館日

毎日曜日(四日・十一日・十七日・十八日・二十五日)